総合科目「からだの仕組みと病気」について

医学部　光　山　正　雄

A Report on the Omnibus General Subject "Human Body and Disease"

Masao MITSUYAMA (School of Medicine)

An omnibus general subject, "Human body and disease" has started in 1995. This subject comprised 15 lectures on different aspects of integrity of human body and diseases given by 15 different lecturers from the School of Medicine. The purpose of this subject is to provide a general idea, not the limited expert knowledge, of medicine to the students belonging to faculties other than medical specialty. The outline of this subject was presented and the points regarding the advantage of this subject over the conventional systematic lecture were discussed.

Key words: Omnibus general subject, Medicine, Medical Science, Disease, Human body

はじめに

平成７年度から医学部担当の総合科目として、「からだの仕組みと病気」が実施された。医学部学生には「医学序説」が同様の総合科目として講義されており、「からだの仕組みと病気」は医学部以外の全学部に向けて開講されている。この講義は第１期半年の間、毎週１回、医学部の教官が交替で講義する方法を採用した。いわゆるオムニバス形式の講義であり、また平成７年度が初めての試みであったので、講義の状況をまとめ、学生に対するアンケート結果も踏まえて問題点を指摘しておきたい。

講義内容と受講状況

平成７年度の本講義は15コマが割り振られ、４月27日のガイダンスを含む第１回目から９月11日まで、以下のような内容の講義が実施された。

からだの仕組みと働き（解剖学　熊木教授）
免疫と病気（免疫病態学　清水教授）
エイズ（内科学　荒川教授）
スポーツと骨（整形外科学　高橋教授）
食事と病気（小児科学　内山教授）
心筋の構造と病気（内科学　和泉助教授）
動脈硬化の成り立ちと病気（病理学　内藤教授）
冠動脈と虚血（内科学　山添助教授）
がんの原因と予防（衛生学　山本教授）
胃がん、大腸がん（外科学　畠山教授）
尿の異常と腎臓病（内科学　中川講師）
ストレスと病気（生理学　平野講師）
近視・遠視・乱視（眼科学　芝崎講師）
アトピー性皮膚炎（皮膚科学　山本助教授）
喫煙と病気（公衆衛生学　田邉助手）

講義の具体的設定にあたり、本講義が文科系理科系を問わず、主として医学部以外の学部学生が受講することを考慮し、からだや病気に関わる問題をできるだけ日常生活に密着した形で講義すること、原則的に教授、助教授クラスの教官が担当することとした。同じ医学系総合講義でも、医学部学生を主な対象とした「医学序説」がより基礎医学および臨床医学の基本の講義内容であるのに対して、上記内容からも分かるように、医学の基礎理論や原理を体系的に講ずるというものではなく、各々の講義が１回で完結する形で身近なテーマ設定がなされている。

第１回のガイダンスを含むからだの仕組みと働きの

講義には、凡そ400名の学生が聴講希望を提出し、医学系以外の学生がこの領域に対して強い興味を抱いていることが推察された（試験が楽で単位がとりやすいからとの意見も聞くが、出席状況やレポート内容からすると、このような観点だけでの受講者は少ないように思われた）。第１回目は視聴覚教室の通路や教卓周囲にも受講者が座り込む盛況であったが、教室の収容能力から250名にしぼって聴講を許可した。９月に全ての予定講義が終了し、最終的に成績評価試験を受験したもの（計225名）の内訳は以下のとおりである。

人文学部	30名	教育学部	29名	法学部	40名
経済学部	33名	理学部	32名	工学部	33名
農学部	28名				

文科系、理科系の全学部にほぼ均等に分布しているが、これは聴講希望者から定員の聴講許可者を選択する際に、極力学部間での差別を排除したこともあると思われる。学年別にみると、１年生121名、２年生67名、３年生28名、４年生９名であった。

講義に対する学生の意識

平成７年度は、成績評価のための試験はレポート採点で行い、また講義内容についてのアンケート調査を実施した。以下、統計的な処理は行っていないが、これらを参考に、「からだの仕組みと病気」の講義に対して学生がどのような感想を持ったかを述べてみたい。

アンケート結果によれば、学生の大多数はこの種の講義に「興味深かった」、「大変役にたった」という感想をもっているようで、一方難点として指摘されたのは、「暗くしてスライドを使うと眠くなる」、「板書をもっと丁寧に」などであった。系統講義ではなくオムニバス形式で15回の講義を15名の異なる教官が担当することによる、体系の無さや連係の欠如といった、当初我々が懸念した点についての指摘は特にみられず、学生も毎回の講義を“読み切り”的に割り切っていたか、むしろ毎回完結のほうが気楽に受講できると考えているか、と想像される。板書や早口での口述が筆記しにくいという指摘は複数みられ、当然改善すべき点ではあるとしても、むしろ低学年（とくに新入生）では、全てをノートに丸写ししないと気がすまない高校時代の習慣がそのまま残っているとも感じられた。数人から指摘があったように、一定の概要や図表のプリントを配布し、ノートを必死にとるより話しを聞き理解納得するように仕向ける努力は今後必要であろう。

レポートは今回実施した15講義から任意に２講義を選び、その概要と学んだ点、今後どのように活かすかをまとめてもらった。興味深かったのは、225人もの学生がおりながら、レポート課題に選ばれた講義が比較的限られていたことである。想像するに、興味深く感じられ、またインパクトを与えらえた講義をレポートしたであろうから、そのような講義が限られていたか、または学生が均一化して各人が同様な講義にのみ興味を示す傾向が生まれているか、と考えられる。レポートの中には、講義の後さらに図書館などで自分なりに知識を深めたと思われるものも見られたが、数的には極めて少なく、大半は講義中にとったノートの内容をまとめたに過ぎないものであった。

おわりに

平成７年度からスタートした総合科目「からだの仕組みと病気」について簡単にまとめた。一人の教官が担当するいわゆる系統講義とは異なり、この種のオムニバス形式講義には限界もあろう。専門知識や系統だった考え方・理念の伝授という点ではあまり力を発揮しないかもしれないが、この方式にはそれなりの長所も多い。講師とテーマが毎回変わるので、学生にとっては毎回の講義がフレッシュに感じられるかもしれないし、一方講師は自分の最も得意とする領域を１回だけ講義すればよいので、必然的に力も入り面白味のある講義内容にすることが可能である。

極めて多数の教科書が出版され、書物以外にも情報過多ともいえる現在にあって、学生は座学による系統講義には少なからず辟易しているようにも感じられる。その意味で、この種の総合講義を上手に実施していくことは、学生の感性を養う上では有効な方法のひとつであるかもしれない。